

バケツ稲から広がる世界

浦安市立南小学校

五年

太田 彩音

「あれ、稲穂がない！」

ある土曜日の昼、ピアノのレッスンから戻ってきたら、信じられない光景が広がっていました。大事に育ててきたバケツ稲の稲穂がなくなっていました。バケツのまわりにはもみからが大量にちらばっていました。家族みんなが初収穫をしようと、明日の日曜日を楽しみにしていたのに。あたりをよく見渡

すと、こちらを見ながらチュンチュンと鳴いているスズメが数羽いるのに気がつきました。まるで早く続きが食いたいな、と鳴いているようにも聞こえました。

スズメに食べられてしまうまでは、とても順調でした。毎日何度も観察できるように、バケツ稲は玄関ドアの前、日当たりのいい特等席においていました。毎日の稲の生長が楽しく、中干しなどの水の管理も一生けん命にお世話をしてきました。もちろんスズメ対策

もしていました。バケツ稲を玄関前に置いたのも、稲の観察以外に人の出入りがめんぱんにあつたほうがスズメもいやがるかなと思つたからです。さうに、稲穂がたれてくるタイミングでネットを張り、その網目には鳥がいやかりそうな反射テープも手作業で何カ所もまきつける工夫をしました。これで完ぺきだと思つていましたが、このような結果になるなんて。きつとスズメも食べたくなるほどおいしい稲ができていたのだと思うことにしま

したが、くやしい結果となりました。

それでも、まだ望みは残つていました。少し生長がおくれていた、となりのバケツ稲は無事だったのです。それから一週間後、まだ少し緑色の部分も残つていましたが、先週のようになつてはいけないと初収かくにふみ切りしました。脱こく、もみすりをし、やゝこのことで小コッパ一ぱい分ほどの精米になりました。自分が育てたお米はどんな味かなと、わくわくしながら食べました。少し早い収か

くになつてしまつたせいか、正直にいうと毎日食べているお米のほうがおいしいなと思ひました。でもそれはそれで、私にとつては大切で、忘れられない格別のお米となりました。今回のバケツ稲の挑戦により、私がおいしいお米をいただくまでには想像以上の工程があり、無事に収かくをおかえることの難しさを知りました。さらに最近、ごう雨による河川のはんらんなど、米作りには気象も味方してくれないといけません。農家の方は、夕

くの困難を乗り越えて、日々稲を育ててくださっていることを改めて実感し、感謝の気持ちから一層強くなりました。これからおいしく、残さずお米を食べていきたいと思ひます。初めてのバケツ稲作りは、ほろ苦い思い出とともに、お米をいただくことに対する感謝や、食に対する世界を広げてくれる貴重な経験となりました。またバケツ稲作りにチャレンジしたいです。